

# 人が立つとき

——源氏物語女三の宮の人物造型——

## 一 女性が「立つ」ということ

『源氏物語』は、主人公光源氏の誕生から死、その子孫たちの人間模様を中心に描かれ、作品内には藤壺や紫の上をはじめ、光源氏を取り巻く多くの女性たちが登場する。「若菜上」巻に初めて姿を現す女三の宮は、光源氏が一途に思い続ける藤壺の姪に当たる重要人物であった。

女三の宮登場前夜、朱雀院は出家を決断する。時に光源氏三十九歳、権力を極め、六条院で紫の上と共に人生の絶頂期を過していた。しかし朱雀院から女三の宮降嫁を打診されると、今は亡き藤壺の面影を求め、女三の宮を「正妻」として迎え入れる。

六条院へと移り住んだ女三の宮は光源氏と夫婦としての

## 阿部 翔子

生活を始めるが、女三の宮の「幼さ」や「いはけなさ」に触れるたび、光源氏は失望を隠すことが出来ない。そして、その「幼さ」は、「若菜下」巻から後の柏木との不義密通、薫の出産、並びに自身の出家を招いてしまう。そのきつかけとなるのが、若菜上巻の女三の宮の「立ち」姿である。六条院に招かれた若い公達が蹴鞠の興じる中、まだ小さい唐猫により御簾が巻き上げられ、女三の宮の「立ち」姿が、柏木と夕霧の目に映る、よく知られた場面である。この一節に注目したい。

猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけまづはれにけるを、逃げむとひこじろふほどに、御簾のそばいとあらはに引き上げられたるをとみに引きなほす人もなし。この柱の

もとにありつる人々も心あわたたしげにて、もの怖ぢしたるけはひどもなり。

几帳の際すこし入りたるほどに、桂姿にて立ちたまへる人あり。階より西の二の間の東のそばなれば、紛れどころもなくあらはに見入られる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまた重なりたるけぢめはなやかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。御髪の裾までけざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八寸ばかりぞあまりたまへる。

御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそばめ、いひ知らずあてにらうたげなり。  
(若菜上、四—一四〇—一四一頁)<sup>1)</sup>

その姿を見た柏木が思いを募らせる一方、夕霧は密かに心惹かれながらも「野分」巻で垣間見た紫の上と比較しながら、「いでや、こなたの御ありさまのさはあるまじかめるものをと思ふ」(若菜上、一四三頁)と、光源氏が女三の宮を軽んじる理由を推察し、自身も女三の宮を「思ひおと」すのであった。

現代生活の中の女性とは異なり、平安時代の女性は「立つ」のではなく「座する」姿が基本であった。そのため、「立つ」動作も現代とは違う受け取られ方をする。更には、不

用意な「歩く」「走る」も同様に不作法な振る舞いという通念の社会があった。それは、女性の地位が高いほど、その傾向にあっただろう。女三の宮は内親王という尊貴な地位を持つ女性である。その女三の宮が「立つ」女性として書かれるのは何故だろうか。本論文では『源氏物語』のほか、『落窪物語』『うつほ物語』『狭衣物語』などを通して、女性が立つ場面にはどのような意味があるのかを考察し、女三の宮が「立つ」意味、並びにその行為が女三の宮の人物造型に与える影響を考えていきたい。

## 二 「ゐざる」

「立つ」動作が不作法とされた時代、女性たちが室内を移動する時の動作が「ゐざる」、つまり膝行であった。

その用例を物語別に調査すると、『うつほ物語』では全11例、そのうち女性10例、男性1例への使用が認められる。『落窪物語』では全3例、『狭衣物語』では全3例、両者はすべて女性の例。『源氏物語』では全36例、そのうち女性34例、男性2例。やはり「ゐざる」は、女性の動作として作中で用いられていることが確認できるのである。

『うつほ物語』で「ゐざる」人物は、いぬ宮が最も多く四例、

次に俊蔭女が三例、女御の君・女一の宮・宰相の上が各一例ずつ。その一例として俊蔭女が「ゐざる」場面を挙げる。

その場面は「楼の上の上」巻に次のようにある。

尚侍ゐざり寄りて、下ろしたてまつりたまひて、御衣引き繕ひなどしたまひて、ゐざり入りたまふ透き影、いぬ宮、玉虫の簾より透きたるやうにて、あなめでたしと見えたり。小さき扇さし隠したまひて、ゐざり入りたまふを、一院、几帳のほころびより御覧じて、いとうつくし、と思す。尚侍、様体細やかに、なまめかしう、あな清らの人や、と見えたり。ただ今二十余ばかりにて、裳の裾にたまりたる髪、艶々として、裾細からず、またこちたからぬほどにて引き添へられて、ゐざり入りたまふを、左のおとど、几帳さしたまふままに見たまひて、いといみじかりける人かな。

〔楼の上上〕三―五八四―五八五頁

琴の伝授を終えた俊蔭女がいぬ宮と共に楼を下る。車から降りて室内に「ゐざり入」る俊蔭女の姿を正頼が見て、「いみじかりける人かな」と述べ、仲忠の姉妹に見えるほど若く見え、自分の娘である仁寿殿の女御と比べてもその美しさや雰囲気勝っていると続ける。俊蔭女は『うつほ物語』に登場する女性の中でも優美な女性として描かれ、その動作にも「ゐざる」が用いられる。

『落窪物語』で「ゐざる」人物は、落窪の君が二例、少納言が一例である。

少納言は、元々中納言の北の方付きの女房であるが、作中ではあこぎの他に唯一中納言邸に落窪の君への好意を明確に語っている人物である。その「ゐざる」場面は、二条邸に参上する場面、落窪の君があこぎを通して声をかける。「少納言あさましくなりて、扇さしかくしたりつるもうちおきて、ゐざり出づる心地もたがひて、「いかなることぞ、誰がのたまふぞ」と言へば」（一一―一八一頁）とある。少納言は、中納言の邸を出たあこぎが二条邸に居ることに驚き、戸惑いながらあこぎの前に「ゐざり出」でる。

『源氏物語』で「ゐざる」人物は、大君・玉鬘が最も多く各4例、末摘花が3例、藤壺・朧月夜・明石の君・落葉の宮・浮舟が各2例、六条御息所・花散里・紫の上・近江の君、女三の宮・雲居の雁・中の君・弁の尼が1例ずつ、女房が3例、尼君が2例となる。『源氏物語』の「ゐざる」については、既に針本正行氏が女君の「ゐざる」から光源氏の本性について論じておられ、「賢木」巻で「ゐざる」藤壺・六条御息所・朧月夜の三人を取り上げて、

「ゐざる」女君は皇族の血脈につながるものであり、王権の祭祀権を象徴する者であった。「ゐざり出」て、「ゐざる人」る女君を光源氏が垣間見た時、藤壺思慕

につながる光源氏の本性の内実化がはかられ、象られていくのである。「賢木」巻で、「ゐざる」行為が語られる、六条御息所・藤壺・朧月夜の君たちは、禁忌を犯し、王権を侵犯するという光源氏の本性を醸成していくものであった。<sup>(2)</sup>

と論じておられるが、「ゐざる」女君としては、末摘花や大君のように天皇家につながる人物に対しても使われているが、明石の君・玉鬘はどうか。血脈ではない女房たちにもその動作に「ゐざる」が使われていることは用例から明らかである。また、確かに光源氏は藤壺との不義、朧月夜との密会により桐壺院・朱雀院両名の王権に大きな影響を与えているかもしれない。しかし明確な根拠の提示もないまま「ゐざる」という一つの動作から光源氏の本性を「王権を侵犯する」と解釈するのはおおげさではないだろうか。「ゐざる」は日常の動作として用いられ、それ以上の意味を読み取することは難しいだろう。

明石の君が「ゐざる」場面は、「松風」巻に次のようにある。

なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。人々もかたはらいたがれば、しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。

光源氏は明石の君と娘に逢うため、大堰の邸を訪ねる。翌朝帰ろうとすると明石の君は別れを惜しみすぐには起き上がることもできない。その様子を光源氏は「上衆めかし」と見るが、作者は「皇女たちと言はむにも足りぬべし」と最高の評価を行っている。

玉鬘の「ゐざる」場面は、四度書かれるが、その一つが「常夏」巻、光源氏が玉鬘の住む西の対を訪れ、和琴を弾く場面

しばしも弾きたまはなむ、聞きとることもや、と心もとなきに、この御ことにろいぞ、近くゐざり寄りて、「いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」とてうち傾きたまへるさま、灯影にいとつつくしげなり。

とある。和琴に興味が惹かれたのか、光源氏の側に「ゐざり寄」り耳を傾ける玉鬘の姿は可憐で可愛らしい。乳母により育てられた玉鬘は、田舎で育ちながらその容姿は、乳母や女房たちにより「気高きよなる」という最上級的美称で書かれ、歌の贈答から教養の豊かさも窺える。

また、作中で最も多く「ゐざる」姿が描かれる人物、宇治の大君については後述する。

『狭衣物語』で「ゐざる」人物は、女二の宮が二例、母

宮・飛鳥井の君・源氏の宮・宰相姫君が一例ずつ。他に女房が二例となる。その内の一人女二の宮が「ゐざる」場面は、卷三、女二の宮の作った法華曼荼羅を嵯峨院で供養する場面。

宮、このほど、百万遍満てさせたまひけり。仏の御前ばかりは、御格子もいまだ参らで、御灯明の明かき方には、御几帳さし遣りて、障子より少しいざり出でて、脇息に押しかかりて、入り方の月の隈なきに、小倉の山も残りなく見ゆるを、眺めさせたまひておはします。御姿、様体、御髪のゆらゆらとこぼれかかるより始め、額髪のただ少し短く見えたる御面つき、あこだ瓜に描きたるやうなる、ただ、ことさら、近くて見まほしきさまのせさせたまへる月影を、…… (二一一七五)

出家を決めた女二の宮は、百万遍の念仏を満たそうと勤行をしている。仏の御前のためか、格子もまだ下ろさず、障子から「いざり出で」て、脇息に寄りかかっている姿の美しさが近くに控える中納言典侍の視線から語られる。女二の宮は嵯峨院皇女で、狭衣の君が横笛を吹いた折に降嫁されるはずだったが、源氏の宮に思いを寄せる狭衣の君は本意でなく、返事を返していなかった。女二の宮の母后のもとに出入りしていた大式の乳母の妹のもとを訪れたおり、偶然女二の宮を垣間見、その「らうたげ」な姿に強引

に関係を結び、若宮を妊娠する。自身の出産と偽り、疑似出産を行った母后は亡くなり、四九日後に自身も出家する。女二の宮は、顔立ちは可愛らしく長く美しい髪を持つ。嵯峨帝は源氏の宮と比べても劣らないだろうと述べ、娘の容姿を自慢する。女二の宮の「ゐざる」場面は、卷三にその性格を表すものとして使われている。

いとかくのみ物のおほゆれば、「よし見たまへ。……」と語らひたまふを、げにあさましきことと、強ひて省きこえん御仲の契りとは見たてまつらねど、昔物語の姫君などのやうに、中の人の言ふに従ひて、ししぶゐざり出でさせたまふべきにもあらず。

(二一九六頁)

中納言典侍は、狭衣の君に文を託され、女二の宮は女房の言葉に従って「ゐざり出で」るような軽薄な性格ではないと語られているのである。

### 三 人が「立つ」とき

人が「立つ」と表記される場面は、『うつほ物語』では108例、そのうち女性が「立つ」のは14例、男性が「立つ」のは94例。『落窪物語』では40例、うち女性が14例、男性は26例。『源氏物語』では全71例あり、そのうち女性は12例、男性は59

例。『狭衣物語』では24例あり、女性7例、男性17例（「た  
たずむ」を含めたものであるが、「立ち止まる」「立ち聞く」  
「立ち聞く」「立ち去る」などの複合動詞は含まない）。

男性が「立つ」行動は日常的なものであり、その用例も  
多く見られるが、「立つ」が印象的な場面がある。その一  
つが「須磨」巻に見られる光源氏の「立ち」姿である。

朱雀院に入内予定であった朧月夜と関係を持ち、右大臣  
方に失脚に追い込まれる光源氏は、自分が後見を務めてい  
る東宮（後の冷泉院）とその母である藤壺への影響を恐れ、  
自ら須磨にて謫居生活を送っている。物寂しい須磨の夕方、  
海の見える廊に出て、景色を眺めている場面、

前栽の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮に、海  
見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ御さま  
のゆゆしうきよなること、所がらはましてこの世の  
ものと見えたまはず。  
〔須磨〕二―二〇〇頁

光源氏の「たたずむ」姿は、「この世のもの」とも思えな  
いほど美しいものと供人たちの称美の対象として書かれて  
いる。光源氏の「立ち」姿は「松風」巻にもあり、大堰の  
明石の君と娘に会いに来た光源氏の姿を見た尼君がその  
「立ちたまふ姿」や容姿を「世に知らずとのみ」思うと称  
美しているように、男性の「立ち」姿は時として称美の対  
象としても描かれるのである。

また、穢れを避けるために男性が「立つ」場面、例えば、  
『落窪物語』では、老中納言の亡くなった後に、三条院に戻っ  
ている落窪の君に逢うために毎日三条院に向う。

大将殿は、若君たちに添ひたまひて、わが御殿におは  
す。日々に立ちながらおはしつゝ、泣きあはれがり、  
かつは、後の御事、あるべきやうの御沙汰も、みづか  
ら（入りるなむ）としてのたまひけれど……  
〔卷之二、二八七頁〕

その時も「立ちながら」対面し、「あるべきやうの御沙汰」  
を受けてでも中に入ろうとする。「御沙汰」というのは死  
の穢れのことである。

女性が「立つ」姿は一般に不作法な振る舞いとされるも  
のの、「立つ」ことが許容されている女性たちも存在する。  
それは女房・女官などの階級である。

「立つ」女性たちの各物語の用例は以下のとおり。

#### 『うつほ物語』

あて宮・中の君・いぬ宮各2例、あやき・仲頼妻・  
使用人（複数）・女一の宮・中の君・涼の姫・女の子（使  
用人）各1例。また、使用人の男と女という形で1例。

#### 『落窪物語』

あこぎ6例、北の方5例、女房1例、北の方一行（男  
女含む）2例



## 『源氏物語』

右近4例、中の君2例、女房・紫の上・少納言・女  
三の宮・中將の君・浮舟各1例。

## 『狭衣物語』

飛鳥井の君乳母2例、飛鳥井の君・今姫君・飛鳥井  
の君の遣児・弁・女房各1例。

女房階級、またはそれ以下の身分の女性が「立つ」場面  
を挙げると、『源氏物語』では、「若紫」巻に紫の上の乳母  
である少納言が、雀が逃げたことで泣いている紫の上を宥  
め、探しに行こうとする場面

このゐたる大人、「例の、心なしのかかるわざをして  
さいなまるこそいと心づきなけれ。いづ方へかまか  
りぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。烏な  
どもこそ見つくれ」とて立ちて行く。髪ゆるるかにい  
と長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふ  
めるは、この子の後見なるべし。

（「若紫」一一二〇六―二〇七頁）

その動作は「立ち」て行くと書かれているが、光源氏はそ  
の姿を「髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり」と好  
意的に捉えている。

『落窪物語』では、落窪の君の女童であるあこぎが、夫  
の帯刀と共に落窪の君と道頼とを結びつける役割を果た

し、

北の方いまして、「ありつる袋はいとよく縫ひたり。  
遣戸あけたりとて、おとどさいなむ」とて、引きたてて、  
錠ささむとすれば、「いかで、『あなたに侍りし箱とり  
て』と、あこぎに告げはべらむ」と言へば、たてさし  
て、「あの櫛の箱得むとあめり」とのたまへば、まど  
ひ持て来て、さし入るる手に入れたれば、引き隠して  
立ちぬ。（「卷之二」一一九頁）

と機転を利かせ落窪の君と道頼の手紙を仲介し、二条邸に  
移った後は、多くの女房たちを率いる頼もしい存在となる。  
女房階級やそれ以下の身分の女性たちが「立つ」ことには  
何の批判も行われていない。むしろ、『源氏物語』の少納  
言や、『落窪物語』のあこぎのように、物語の重要な役割  
を果たす女性たちが「立つ」ことによって物語が進んで行  
く様子が書かれている。更に言えばあこぎのように物語前  
半ではまだ一人の女童でしかない女性は、立ち歩かなけれ  
ば仕事にもならなかったであろう。女房、それ以下の人々  
にとって「立つ」動作は、男性と同様に日常動作の一部と  
して使われていたようである。

では、高貴な身分の女性たちが「立つ」動作はどのよう  
に捉えられているのだろうか。第四章にて、先に述べた「あ  
こぎ」女性との関連から考えていきたい。

#### 四 「立つ」女性と「ゐざる」女性

今回調査の対象とした四つの物語、『うつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』『狭衣物語』などが成立した時代、高貴な女性たちは室内では「ゐざる」ことが基本的動作であり、「立つ」ことは不作法なことでとされていた。しかし、先に述べたようにその中でも「ゐざる」女性と「立つ」女性の二種類が存在する。

『うつほ物語』のなかでは「立つ」女性として特筆すべきなのが式部卿の娘・中の君である。中の君は、「蔵開中」に登場する。兼雅により一条殿に迎え入れられていたが、俊蔭の娘と仲忠をうつほから三条殿に引き取ると、他の妻妾を顧みることなく、零落していったが、仲忠の助言により三条殿の東角の家に引き取られた。

中の君は、俊蔭女と仲忠の繁栄の犠牲者である。兼雅が久しぶりに一条殿を訪れた時、その貧窮ぶりはひどいものであった。破れた屏風、一つ二つの几帳、貧相な食事、周りには乳母とその娘や孫と、下仕えが一人いるだけの生活ぶり、兼雅は思わず涙を流す。中の君が「立つ」のは、兼雅が文を残してその場を去る場面、

いかでやらむと思せど、出で走るべき姿したる人もなければ、押し揉みて、手に握りて、寝殿に向かひたる

柱もとに立ちて見たまへば、左大将下りかかりて、東の一の対の方へおはしぬ。（「蔵開中」二一五五〇頁）  
文に気付いた中の君が返事を渡したいと思うが、きちんとした身なりの者がいないため、諦め兼雅を柱の下に「立ち」て見送る。更に、もう一箇所女三の宮が車に乗せられ三条殿へ向かうのを中の君が見ている場面。

中の君、「さはかくするなりけり。わがいかさまにあらむとすらむ。この文だに見せずなりぬること」と泣く泣く持ち、かく思ひ、立ちたまへり。

（「蔵開中」二一五五六頁）  
中の君はここでも「立ちたまへり」と立ったままその様子を見ている様子が書かれる。中の君の生い立ちや容姿は深く描写されておらず、その貧窮した生活ぶりが書かれているだけであるが、兼雅が去った後の生活ぶりを見るに、兼雅以外頼りとなるものがないのだろう。そしてそれは俊蔭女も同様であった。

「蔵開上」巻、文を渡せずに立ちつくしていた中の君のもとを兼雅が訪れ、文を渡す場面「この文投げ出したまへれば」（「蔵開上」二一五五七頁）とある。本来、文のやり取りは女房を通して行われるものであるが、中の君は自ら文を投げ渡す。『新編全集』（頭注には「自ら文を投げやる中の君の行為は、たしなみに欠けている」とある。俊蔭女



の理想的な女性像と比べ、中の君を嗜みに欠ける人物として書くことで、兼雅が俊蔭女を愛し、他の妻たちを蔑ろにする行為を正当化しているように思える。つまり中の君が「立つ」女性、俊蔭女を「ぬぐる」女性として書き分けることで、俊蔭女の理想性を高めるものとして利用されているのである。

『落窪物語』では、継母中納言の北の方と継子落窪の君は否応なしに比較されることになる。北の方は落窪の君を女房以下の扱いとして「寢殿の放出の、また一間なる落窪なる所の、二間なる」場所に住ませ、劣悪な環境で縫い物などの雑用を押し付けている。その容貌は、道頼によると、

うちむつかりて行く後手、子多く生みたるに落ちて、  
わづかに十すじばかりにて、居丈なり。(うちふくれて、  
いとをこがまし)と、少将つくづくとかいばみ臥した  
り。  
(卷之八四頁)

とあり、およそ腰までしかない短い髪と、太った体つきの醜さが書かれている。それに対し、落窪の君に対しては、粗末な身なりだが、髪かたり、髪のかかり具合の美しさが書かれる。そんな北の方の「立つ」場面は、落窪の君の持つ鏡箱を借りるためにやって来る場面、

げに入りたれば、「かしこき物をも、買ひてけるかな。

この箱のやうに今の世の蒔絵こそさらにかくせね」と  
て、かき撫でたまへば、あこぎ、(いと憎し)と見て、  
「この御鏡の箱もなくてや」と言へば、「今また求めて  
奉らむ」とて、立ちたまふ。(卷之一 七二頁)

落窪の君の母の形見である鏡箱を北の方が奪い、「立ち  
たまふ」時、あこぎは「いと憎し」とその心内を漏らす。  
他にも落窪の君に言いつけた縫い物がまだ手が付けられて  
おらず、いらだちをぶつける場面、

「おどろき馬のやうに手な触れたまひそ。人だねの絶  
えたるぞかし。かううけがへなる人にのみ言ふは。こ  
の下襲もただ今縫ひたまはずは、ここにもなおはし  
そ」とて、腹立ちて、投げかけて立ちたまふに、少将  
の直衣の、後のかたより出でたるを、ふと見つけて「い  
で、この直衣はいづこのぞ」ち立ちとまりてのたまへ  
ば……  
(卷之一 八三―八四頁)

落窪の君に縫い物を投げつけ、その場を「立ち」去る。  
自然な動作であるはずの「立つ」っての移動も、北の方には  
特に強調して使われているように見える。あこぎが少しの  
間落窪の君の元を離れ、道頼と二人になった時、縫い物の  
様子を気にした北の方が落窪の君を訪れる場面、

〈男したるけしきは見れど、《よろしき者にやあらむ》  
とこそ思ひつれ、さらにこれはただ者にはあらず。か

くばかり添ひゐて、めめしくもろともにするは、おほろけの志にはあらじ。いといみじきわざかな。よくなりて、我次第には、かなふまじきなめり」など思ふに、物縫ひのこともおぼえず、ねたうて、なほしばし立てれば、「知らぬわざして、まろも困じにたり。そこも寝ぶたげに思はしためり。なほ縫ひさして臥したまひて、北の方、例の腹立てたまへ」と言へば、「腹立ちたまふを見るが、いと苦しきなり」とて、なほ縫ふに、あやにくがりて、灯をあふぎ消ちつ。

〔卷之二〕九六頁

道頼がいることに気付き、二人の会話を「立ち」聞きする。『落窪物語』ではこのような二人の性格の違いを表すと同時に、継子虐めの加害者である北の方の動作に「立つ」という不作法な動作をする人物として貶め、被害者である落窪の君を「ゐざる」女性として比較することで、落窪の君の優れた人間性が強調されるのである。

『源氏物語』で最も多く「ゐざる」女性の一人、大君とその妹である「立つ」中の君が対照的に表現される。椎本の巻、

薫が八の宮亡き後の宇治を訪れ、二人の姿を垣間見る場面、部屋を移動しようと、姿を見られないために几帳が立てられていたが、風により簾が吹き上げられ、二人の姿が

あらわになる。

まず一人たち出でて、几帳よりさしのぞきて、この御供の人々のとかう行きちがひ、涼みあへるを見たまふなりけり。濃き鈍色の単衣に萱草の袴のもてはやしたる、なかなかさまかはりてはなやかなりと見ゆるは、着なしたまへる人からなめり。帯はかなげにしなして、数珠ひき隠して持たまへり。いとそびやかに様体をかしげなる人の、髪、桂にすこし足らぬほどならむと見えて、末まで塵のまよひなく、艶々とこちたうつくしげなり。

……また、ゐざり出でて、「かの障子はあらはにもこそあれ」と見おこせたまへる用意、うちとけたらぬさまにて、よしあらんとおぼゆ。頭つき、髪ざしのほど、いますこしあてになまめかしさまさりたり。

〔椎本〕五二二七―二二八頁

この後も大君の嗜み深さと、「ゐざる」様子の優美さや容姿の気高さへの称美が続く。薫が二人の姿を垣間見たのはこれが初めてではない。ここでは引用を省略するが、姉妹と薫の出会いの有名な場面、「橋姫」巻でも二人の姿を垣間見ている。そこでは、「いみじくらうたげににほやか」という中の君と「重りによしづきたり」という大君といい、中の君が「たち出で」て、大君が「ゐざり出で」るのは、二人のこのような性格の違いを表すものとして作中で「立

つ」と「ゐざる」が対比して用いられていることが分かる。

また、宇治十帖には、もう一人の「立つ」女性である浮舟がいる。浮舟が「立つ」場面は、宇治川で自殺を計るが横川の僧都に助けられる。横川の僧都の妹である尼の懸命な世話により一命を取り留め、意識を回復したのち、小野の庵で暮らし始める。そこへ尼の娘婿であった中将が訪れ、浮舟の姿を垣間見たことを弟の禪師の君に語る。

「風の吹き上げたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりと思ひつらん、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ……」

〔手習〕六一三―一頁

「立ちて」奥へ入っていく浮舟の長い髪の様子を見て、心惹かれる様が描かれているのである。「ゐざる」は、室内での移動動作として用いられる。簾近くから奥へと入っていく場合、「立ちて」歩いていくことは許容の範囲なのだろう。むしろ私が気になるのは同巻三〇八頁で同様に中将が尼君に浮舟のことを垣間見たことが書かれていることである。尼君は、「姫君の立ち出でたまへりつる後手を見たまへりけるなめり」〔手習〕六一三―八頁〕と思い、一人心の内で浮舟と中将が結びつくのを願う。この場面、尼君は浮舟が端近くに「立ち出で」て外を見ていたと推察する。『源氏物語』では、先に述べたように「ゐざり出づ」と「立

ち出づ」で二人の性格の違いを表していた。同様にこの場面でも大君と浮舟の性格の違いを表すものとして「立ち出づ」が使われているのかも知れない。

浮舟は、亡き大君と容姿が似通っているという。それは、異母姉中の君が「あやしきまで昔人の御けはひに通ひたりし」〔宿木〕五一―四五一頁〕と思うほどであった。大君を失くし憔悴する薫に中の君は、浮舟を愛人に勧める。薫もまた宇治で偶然浮舟を垣間見て、「これを見るにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに、例の、涙落ちぬ。尼君の答へうちする声けはひ、宮の御方にもいとよく似たりと聞こゆ」〔宿木〕五一―四九三頁〕と涙する。しかし実際に浮舟を宇治へと連れてくると、浮舟が少々田舎じみているのに対して、大君の「あてになまめかしかりし」姿が思い起こされてならない。その性格も高貴な薫の姿に気後れし、「ただいとつましげにて、ひたみにち恥ぢたる」〔東屋〕五一―九八頁〕様子が薫には物足りなく感じられる。

浮舟は大君と容姿は似通っていても、その身分と性格とが大きく異なる人物として作中に登場している。大君が「ゐざり出で」、浮舟が「立ち出で」という二人の違いはやはりその性格の違いを表すものとして用いられていると考えてよいだろう。

一方で、「立つ」と「ゐざる」動作が両方用いられてい

る女性もいる。それは「中の君」である。中の君は、先に挙げたように、「立ち出で」て移動する場面が書かれているが、「ゐざる」場面も存在する。それは「宿木」巻に次のようにある。

女君、まことに心地もいと苦しけれど、人のかく言ふに、掲焉ならむも、また、いかがとつましければ、ものうながらすこしゐざり出でて、対面したまへり。

〔宿木〕五―四四五頁

匂宮の妻となった中の君を薫は後見役として支えている。しかし、薫は大君の面影を中の君に求める。それが中の君に苦しく思え、薫を避けている。しかし、事情をしらない新参の女房は氣を利かせ二人を御簾ごしに対面させる。中の君は既に匂宮の子どもを妊娠している。母親として自分を愛しんできた姉の死により、中の君は精神的な成長を見せる。「立ち出で」る女性から「ゐざり出で」るこの変化はその一つと見ることもできる。

## 五 『源氏物語』女三の宮

これまで「立つ」女性と「ゐざる」女性とを挙げて見えたが、その性格の違いが「立つ」と「ゐざる」により表されていた。つまり、女性の動作はその女性の持つ、個性

が大きな影響力を持つているのである。そもそも女三の宮という人物はどのように描かれているのか。

若菜上巻、朱雀院の病氣も重くなるばかり、朱雀院は自分の出家後の女三の宮の進退を心配し、婿を取ることに決めた。しかし、朱雀院を含め女三の宮の乳母は「皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど」と左中弁に述べるなど、女三の宮の臣下への降嫁に消極的であった。今井氏は、「女三の宮の降嫁」においてその理由を

……まず皇女が結婚するということは一般に軽々しく身苦しいものだという考え方が示される。……継嗣令では天皇妃は内親王に限り、また内親王以下四世王女までは臣下に降嫁し得ないというきびしい規定がある。この制限は、延暦二年にややゆるめられ、三世四世の王女のみは現任大臣および良家の子弟に嫁することを許されるようになったが（藤原氏へはとくに二世王女まで）、なお内親王は許されず、皇女の降嫁は源性を賜った差が皇女潔姫の良房へのそれが最初であった。しかもこのことがいかに破格のことであったか………皇女の結婚はいよいよ困難となり、人間的解決を計るかぎり、律令は崩れざるを得ない。……それゆえに、朱雀院が、女三の宮の独身を好ましいと思ったのは、むしろ自然である。……<sup>③</sup>

と述べており、朱雀院や乳母が女三の宮の降嫁を洩る姿は当時の社会状況を反映したものであった。その中でも朱雀院が女三の宮の結婚を決めたのは、朱雀院に後ろ盾のないことを不安視したためである。朱雀院は、女三の宮のもとを訪れ、乳母とともに婿選びを始める。

姫宮のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも、「見はやしたてまつり、かつは片生ひならむことをば見隠し教えきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」など聞こえたまふ。〔若菜上〕四―二七頁〕

朱雀院の目に映る女三の宮の姿は、まだまだ可愛らしく、あどけない子どもであった。朱雀院は、そんな女三の宮の姿を見るにつけてもやはり、しっかりとした婿（後見役）が必要だと考える。朱雀院が女三の宮をどう見ていたか、本文から眺めてみよう。

① 姫宮のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも」

（二七頁）

② 「見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならむことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」

（二七頁）

③ 「姫宮は、あさましくおぼつかなく心もとなくのみ

見えさせたまふに、さぶらふ人々は、仕うまつる限りこそはべらめ。」

（三二頁）

④ 「……思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま推しはかるることなるを。これかれの心にまかせてもてなしきこゆる、さやうなることの世に漏り出でむこと、いとうきことなり」など、見棄てたてまつりたまはむ後の世をうしろめたげに思ひきこえさせたまへれば、いよいよわづらはしく思ひあへり。〔二七頁〕

⑤ されど、あはれにうしろめたく、幼くおはするを思ひきこえたまひけり。

紫の上にも、御消息ことにあり。「幼き人の、心地なきさまにて移ろひものすらんを、罪なく思しゆるして、後見たまへ」

（七五頁）

⑥ 院御覧じて、何ごともいと恥づかしげなめるあたりに、いはけなくて見えたまふこといと心苦しう思したり。

（七六頁）

⑦ あまりに何心もなき御ありさまを見あらはされむも、恥づかしくあぢきなけれど、さのたまはんを心隔てむもあいなしと思すありけり。

（八八頁）

一方、光源氏は、女三の宮に対して、

① 姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中

にも、いといはけなき気色して、ひたみにち若びたまへり。かの紫のうかり尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、かれはされて言ふかひありしを、これはいといはけなくのみ見えたまへば、  
(六三頁)

② いといはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。  
(六八―六九頁)

③ 女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしく、よだけく、うるはしきに、みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきしましたまへり  
(七三頁)

④ ただ聞こえたまふまに、なよなよとなびきたまひて、御答へなどをも、おほえたまひけることは、いはけなくうちにのたまひ出でて、え見放たず見えたまふ。  
(七四頁)

⑤ あまりに何心もなき御ありさまを見あらはされむも、恥づかしくあぢきなければ、さのたまはんを心隔てむもあいなしと思すありけり。  
(八八頁)

⑥ 姫宮のみぞ、同じさまに若くおほどきておはします。女御の君は、今は、公さまに思ひ放ちきこえたまひて、この宮をばいと心苦しく、幼からむ御むすめのやうに、

思ひはぐくみたてまつりたまふ。

(「若菜下」四―一七八頁)  
⑦ 二十一二ばかりになりたまへど、なほいといみじく片なりにきびはなる心地して、細くあえかにうつくしくのみ見えたまふ。  
(「若菜下」四―一八四頁)

⑧ 宮もうちはへて、ものはつつましく、いとほしとのみ思し嘆くけにやあらむ、月多く重なりたまふまに、いと苦しげにおはしませば、院は、心憂しと思ひきこえたまふ方こそあれ、いとらうたげにあえかなるさまして、かくなやみわたりたまふを、いかにおはせむと嘆かしくて、さまざまに思し嘆く。

(「若菜下」四―二六六―七頁)  
⑨ いといたう青み瘦せて、あさましうはかなげにてうち臥したまへる御さま、おほどきうつくしげなれば、いみじき過ちありとも、心弱くゆるしつべき御ありさまかなと見たてまつりたまふ。(「柏木」四―三〇三頁)  
さらに、紫の上の目に映った女三の宮は、こう描かれる。

① 御手、げにいと若く幼げなり。さばかりのほどになりぬる人はいとかくはおはせぬものと目とまれど、見ぬやうに紛らはしてやみたまひぬ。  
(七二頁)

② いと幼げにのみ見えたまへば心やすくて、おとなおとなしく親めきたるさまに、昔の御筋をも尋ねきこえ



たまふ。

(九〇頁)

③ 背きたまひにし上の御心向けも、ただかくなむ御心隔てきこえたまはず、まだいはけなき御ありさまをも、はぐくみたてまつらせたまふべくぞはべめりし。

(九二頁)

夕霧は女三の宮の「立ち姿」を見てしまつたひとりであり、光源氏の前に朱雀院から宮の降嫁を打診されていた人物でもある。夕霧は野分の巻で紫の上の姿も垣間見ており、その姿と女三の宮と比較している。夕霧は女三の宮とその周りの女房たちを見て、

① おのづから御けはひありさまも見聞きたまふに、いと若くおほどきたまへる一筋にて、上の儀式はいかめしく、世の例にしつばかりもてかしづきたてまつりたまへれど、をさをさげざやかにもの深くは見えず、女房なども、おとなおとなしきは少なく、若やかなる容貌人のひたぶるにうちはやぎさればめるはいと多く、数知らぬまで集ひさぶらひつつ、もの思ひなげなる御あたりとはいひながら、何ごどものどやかに心しづめたるは、

(二三三頁)

② 大將は、心知りに、あやしかりつる御簾の透影思ひ出づることやあらむと思ひたまふ。いと端近なりつるありさまを、かつは軽々しと思ふらむかし、いでや、

こなたの御ありさまのさはあるまじかめるものと思ふに、かかればこそ世のおぼえのほどよりは、内々の御心ざしぬるきやうにはありけれどと思ひあはせて、なほ内外の用意多からずいはけなきは、らうたきやうなれどうしろめらきやうなりやと思ひおとさる。

(二四三―二四四頁)

一度は、自分に降嫁されるかもしれないなかつた姫君である。夕霧も氣になり用事に託けて六条院を訪れる。それで聞こえてくるのは世間で名高い女三の宮の高貴さではなく、若く華やかな女房たちに囲まれ、軽はずみな態度を取る女三の宮の姿であつた。垣間見た紫の上の姿と比較し、紫の上ならあんなことはしないだろうと思えば、女三の宮を軽んじる光源氏の姿も納得であつた。

「若菜上・下」巻で、女三の宮に対する好意的な見方は、その「立ち姿」についてのみである。これは、柏木の目から見た女三の宮の姿であらう。女三の宮に恋心を寄せていた柏木の目には、女三の宮の欠点は映らない。むしろ、垣間見た喜びにより、その姿が一層神秘的なものとして偶像化されていくのである。このような柏木の例を除くと、女三の宮に対する印象を人物ごとに見てきたが、全体的に見ても、「いはけなし」「幼し」「何心なし」「もの深くは見えず」「至り少なく」「うしろめたし」などの表現が多く使わ

れ、容姿面でも「片なり」「うつくし」などの表現が使われている。つまり、年齢や身分に釣り合わないほどの性格の未熟さが各所で書かれ、幼稚な内親王であることが強調されているのである。そしてその性格は大人になっても変わることはない。息子である薫の目から見てもその姿は「いと何心なく」と語られるのである。

## 六 『源氏物語』 女三の宮の原点

『源氏物語』の女三の宮が当該物語内でオリジナリティのある人物として描かれていることはいうまでもないが、その人物造型には先蹤はないのだろうか。ここで比較対照してみたい人物がいる。『うつほ物語』の女一の宮である。二人には共通した「立つ」場面があった。女三の宮の場合、本稿の発端となった若菜上巻であった。『うつほ物語』の女一の宮の場合はこうだった。

鳥の舞を見ようと立っていたところに、仲忠が現れる。

中納言入りおはして、宮の鳥の舞見たまふとて、御帳の柱を押さへて立ちたまへるを、「あな見苦し。何ぞの破れ子持ちかものは見る」とて、引き据ゑたてまつりて、……

（蔵開上）二一三七〇頁）  
一方は蹴鞠、もう一方は鳥の舞を見るために端近に

「立」っていた。そしてその姿を男性に見咎められている。他にも二人にはいくつかの共通点が見いだせる。

- ① 女御腹の皇女
- ② 「朱雀院」の鍾愛の娘
- ③ 身代わりとしての結婚（仲忠↓あて宮）（光源氏↓藤壺）
- ④ 正妻という地位

これらの点から見れば、『源氏物語』の女三の宮が『うつほ物語』の女一の宮を先蹤として造型された人物である可能性が非常に高い、と考えてよいのではないだろうか。

二人が「立つ」場面で違うのは、周囲の反応である。女一の宮の場合、夫である仲忠が女一の宮を引つ張って座らせているが、女三の宮の場合、夕霧が「急ぎ立て」女三の宮自身が中に入るまで、周りの女房たちは立っていることにも気づかず、また、御簾が捲りあげられる不測の事態に騒ぐことしかできない。女三の宮と周りの女房に対して、その「若やかなる容貌人のひたぶるにうちはやぎさればめる」女房たちが多いことを夕霧は不安に思っていたし、朱雀院も乳母たちもしきりに女三の宮の「幼さ」を心配する様子も繰り返し書かれる。

更に言えば、共通点に挙げた④では、結婚後にその違いが見られる。光源氏は、朱雀院の手前女三の宮を正妻とし

て遇しながらも、心の内では紫の上と比較しながら失望を覚え、「ゆかり」像から脱落させた。しかし、女一の宮は、長年あて宮に心を寄せていた仲忠は結婚生活の中で、次第に女一の宮へと心移していき、「身代わり」からの脱出を果している。

では、この二人の違いは何を意味しているのだろうか。

私は二人の違いは、その養育環境の違いにあるのではないかと考えた。女一の宮の母親、仁寿殿の女御はまだ存命であり、右大臣一族によって多くの女房をつけられ、養育されていた。しかし、女三の宮は、母親の死後も朱雀院に養育されていたことから、おそらく母方の親族はいないのだろう。朱雀院は多くの女房たちをつけて養育させていたのだろうが、朱雀院はこれまでの反応から見て、始めは女三の宮を降嫁させるつもりはなかったのだろう。女性が身に着けるべき教養の欠如が感じられる。その点、女一の宮は祖父によって将来の東宮妃候補であるあて宮とともに養育され、母親とともに住んでいた。『うつほ物語』では大宮と正頼の例を見ても、皇女の結婚は避けられていなかったのだろう。女一の宮も大宮同様、将来は有力な貴族に降嫁するために養育されたとも推察できる。

『養老律令』によると、内親王が持つ乳母の数は三人までと定められている。女一の宮の場合は不明だが、女三の

宮の場合は三人の乳母の存在が確認できる。左中弁の妹、小侍従の母、弁の尼である。乳母と養子というのは特別な関係であり、時には自分の母以上の存在であった。吉海直人氏は『源氏物語の乳母学——乳母のいる風景を読む』において乳母の重要性について、

もともと上流階級の場合、父親は元服以前の子供の養育にはほとんど関与しないのだし（通い婚）、肝心の母親にしても授乳を含めて子供の養育には一切かわからず、全てを乳母達に任せるのが一般的であった。もちろん当時の衛生・医療事情からして、出産による母親の死亡率は極めて高かったであろうから、必然的に母親の手を借りなくても子供の養育が可能なようなシステムは確率していたに違いない。

そうなると、たとえ孤児あるいは片親であっても、しっかりした後見人や乳母が居る場合は、子供にとってそのことは必ずしも致命的になるとは限らない。<sup>(4)</sup>と述べられている。確かに「しっかりとした乳母」の不在は、子どもにとって不幸なことであった。

例えば、『狭衣物語』の今姫君である。今姫君は母と乳母を早くに亡くし、洞院の上に引き取られる。洞院の上は三人いる堀川の大臣の妻の中で最年長であるが、他の北の方とは違い、子どもにも恵まれず、源氏の宮のような養女

を迎えることもなかった。そのため「後の宮にありける伯督の女」が貧しい生活をしていたので「つれづれの慰め」にしようとして迎え入れたのである。その時、今姫君は二〇歳、世間では堀川の大臣の娘とも噂され、容貌は「おほらかにこまかに」で、人柄は「児めかしきさま」なので、洞院の上は、長年の願いが叶ったとして喜ぶ。

この君は、年になりたまひにけれど、御心ばへは、あまりおほめきすぎて、心幼く、ものはかなげにおはしける。限りなく思ひかしづきける御目にだに、うしろめたう、心苦しきことを、明け暮れ嘆きけるに、母にも乳母にも、うち続き後れたまひて、いとど思ひやる片なうほれしきに、にはかに知らぬ所に渡りて、ありつかず、はなばなともてかしづかせたまへるありさまの、我は我とおほえず、……

〔巻一 一一〇二頁〕

しかし、今姫君は、洞院の上にどんなに、「かしづかれ、はなばなと」大切に育てられようと、「おほめき」「心幼く」「はかなげ」な今姫君の性格は、洞院の上の華やかな生活ぶりや、その性格に順応することが出来ず苦しむ。そんな今姫君をこれまで育てていたのが、母代である。この女性は今姫君の母の遠縁であるが、貴族の女性としての嗜みはまったく身につけていない。そしてそんな母代に育て

られた今姫君が優れた女性のはずもなく、まるで『源氏物語』の近江の君のような女性である。例えば、字数の合わない歌を母代に言われるままに狭衣の君に詠みかけ、琵琶を弾きながら「いたち笛吹く、猿奏づ」とうたい、母代も「いなごまちは拍子うち、きりぎりすは」と唱和したりと、狭衣の君の失笑を買う。しかし、今姫君が「立つ」場面では、意外とその評価は悪くない。

几帳どもも倒れなどして、もの騒がしければ、つくづくと見入れて、とみに入りたまはぬに、姫君も端つ方におはしけるなるべし、今ぞ立ちて入りたまふ。

色々どもに、濃き掃ちたる桜の小桂着たまへるうしろでをかしく、髪は少し色にて、さはらかなる下がりばなどあてやかにて、小桂と等しうぞ見ゆる。うち見返りて、顔は赤うなりながら、とみに居ず、あきれたれど、さる方にてうつくしげなるさまぞしたまへる。

〔巻三 二一四〇～四二頁〕

狭衣の君が今姫君の元を訪れると、几帳が倒れ、それを直すはずの女房たちも共に倒れてしまう。端近くに座っていた今姫君は、狭衣に見られていることに気づき、ようやく奥へと入っていく。その間も今姫君は立ったままである。しかし、狭衣の君は、今姫君の育ちならばしょうがないと一定の理解を示している。やはり問題なのは、この母代と

いう人物なのである。母代は、物語中三度「立ち走る」人物である。それは、入内予定の今姫君の元に宰相中将が忍び入るのを見つけた場面で、「しぼし。逃がしやりたまふな、人々。まづ上の御前に申さん」とて、立ち走り行く足音、おどろおどろし。」（巻三「二一六八頁」更に続けて、また「立ち走り、また、君の臥したまへるかたはらに来て、床より引き下ろしつ、」（巻「三七〇頁」最後にもう一度、「せちに心地のおぼえて、また、立ち走り、北面に行きて、」誰も誰も、むげにけしき知る人なくて、入り来る人あらじ。」（巻三「七二頁」）このように六八七二頁にかけて繰り返して三度「立ち走る」様が書かれる。「走る」というのは、「立つ」動作以上に平安時代、醜い行為とされていた。「立ち走り」、詰問する母代に耐えられず、今姫君泣きながら髪を切り落とす。一連の出来事を聞いた堀川の大臣は笑い、洞院の大臣はそのような二人を邸へ迎え入れ入内させようとしたことが情けなく、恥ずかしくてどうしようもなかった。今姫君の一連の悲劇な母と乳母、特に乳母の不在によるものと考えられる。乳母が近くにいれば、おそらく今姫君は普通の姫君として教養を与えられ、しかるべき時にしかるべき相手との結婚もあったかもしれない、しかし実際には乳母は亡くなり、母代の身の丈に合わない上昇志向の犠牲者となった。

乳母というのは養子にとって両親以上の影響力を持っていたのである。『源氏物語』でも光源氏は乳母の見舞いを行っているし、現実世界でも紫式部の娘である藤原賢子は、後冷泉天皇に乳母として仕え従三位に叙せられており、その影響の強さが感じられる。女三の宮の乳母子と女三の宮の性格の関連については、清水好子氏が『源氏物語の女君』に、

女三宮と、柏木の密通事件も両方の乳人子を通じ合つて、恋文の取り次ぎをしている。これは女三宮方の乳人子が思慮がなくて、柏木をあまりに内親王のお側近く案内したために、男の思わざる激情を刺激し、不幸が起ったという風にことを運んである。女三宮の乳人子がそうだから乳人の教育よろしからずということになり、女三宮の未熟さやいたらなさをも納得させてくれる。<sup>3)</sup>

と述べられている。このように、女三の宮の乳母たちのいたらなさや女三の宮と「立つ」女性として育て、周囲から「いはけな」く、幼い内親王として侮られる性格が形成されていったのではないかと推察できる。

『源氏物語』で女三の宮としばしば比較されるのが紫の上である。女三の宮は紫の上と比べると軽々しく慎みがないと批判される。年齢に似合わない「幼さ」によって、貶

められる。しかし、紫の上の登場巻「若紫」を見ると、幼少期の紫の上に対しても「らうたし」「いはけなし」という語を多く見つけることができる。更に、紫の上の登場場面が、「立ち」姿であることも注目に値する。

十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り來たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくげなる容貌なり。髪は扇をひろげたやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

〔若紫〕一一二〇五頁〕

この時の紫の上は、まだ裳着前の子どもである。そのため、「立ち」姿はとくに問題とはならないが、紫の上の祖母である尼は、紫の上の幼さに対し苦言を呈している。泣きながら走り寄ってきた紫の上を尼は「つゐたり」て話を聞かせる。つまり、立っていた紫の上を「座らせて」から話をするのである。その内容は、今は亡き、娘（紫の上の母）と比較して、紫の上の幼さを嘆き、自分の亡き後の去就への心配であった。尼は、その後亡くなり、紫の上は父である兵部卿の宮に引き取られるはずであったが、光源氏に浚われ、強引に二条院に連れて行かれる。その場面でも、紫の上の「幼さ」が強調される。

もう一箇所、紫の上が立ったことを予想できる場面があ

る。複合語であったために用例には入れなかったが、それは「紅葉賀」巻の元旦の朝拝に参内する前に紫の上の部屋を除く場面に

人々端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛の中の源氏の君つくるひたてて、内裏に参らせなどしたまふ。

〔紅葉賀〕一一三二二頁〕

女房たちの動作が「出でて」と書いてあるのに対し、紫の上の動作はわざわざ「立ち出で」て、と書くのは紫の上はまだ「立つ」子供であることを強調しているのである。しかし紫の上は光源氏に引き取られ養育される中で、少しずつ大人の女性へと変化していく。それに対し女三の宮は裳着後にその「立ち」姿が書かれている。紫の上に使われている形容詞を見るに、女三の宮と紫の上の幼少期はひどく似たものではなかっただろうか。「いはけなし」「幼し」と言われた二人の性格、その庇護者、つまり光源氏と朱雀院の違いに求めるのは少々行き過ぎた考え方かもしれない。しかし、光源氏を物語の主人公とし、これまで幾度も朱雀院は光源氏の敗北者であることが繰り返される。つまり、朱雀院の娘である女三の宮が光源氏に養育された紫の上よりも優れた存在として書かれることはまずありえないのである。そしてもう一つ二人の違いは、父親の存在である。



どちらにも確かに父親は存在している。しかし、紫式部の父親兵部卿の宮は、紫の上に対して非常に冷淡である。北の方の手前母親が亡くなっても紫の上を引き取ることなく、紫の上が光源氏に引き取られた後もほとんど交流がなかった。それに対し女三の宮と朱雀院は、何度も述べているように非常に親密であった。女三の宮は朱雀院を頼みとして生き、朱雀院はそんな女三の宮をこの上なく溺愛している。つまり女三の宮は朱雀院という絶対的な庇護者の下に生きてきた。そしてそれは光源氏の妻となっても変わることはない。朱雀院、東宮という二人の庇護の下、女三の宮の「いはけなさ」は今まで許容され、そして光源氏からも許容され続けるのである。朱雀院は女三の宮の幼稚で、深く考えず物事を口に出す性格の欠点を補うため、地位を与え続けるのである。絶対的な庇護者と自らに与えられた地位により女三の宮は変化を求められなかった。しかし紫の上は違う。光源氏は紫の上を二条院の主人として遇し、大切に育てていたが、決して父親ではない。藤壺の変わりとして、将来の自分の妻として、育てられるのである。紫の上は光源氏の望むままに美しく、教養深く理想の女性として成長した。しかし、それは紫の上の意志だったのだろうか。藤壺の「紫のゆかり」として引き取られた紫の上が光源氏の望みに反して成長することは許されなかったのだ

はないだろうか。紫の上の中に、そのような考えがあったかは分からない。しかし、「いはけな」い少女だった紫の上が光源氏の思うような変化を遂げたのは、そう光源氏に求められたからではないだろうか。父親と言う絶対的な庇護者のいない紫の上は、光源氏の求めるままに、光源氏に愛されるために自分の内面を変化させていったのではないだろうか。

## 七 おわりに

女三の宮が産み落とした薫の存在は、光源氏にとって自分の過去の過ちを思い起させる。そのために女三の宮は形成されたのではないかという考え方がある。『源氏物語』本文中では、柏木との密通の氣付いた光源氏が、今は亡き父に対して、

故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、と思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまいき過ちなりけれ、と近き例を思にぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。  
〔「若菜下」四―二五五頁〕

と、回想しており、更に女三の宮が出産した時には、さてもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひし事の

報いなめり、この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや、と思す。

〔柏木〕四―二九九頁〕

と光源氏の心中が書かれている。「恐ろしと思ひし事」とは、藤壺との不義密通のことであり、柏木と女三の宮の不義密通はその「報い」と考えていることが分かる。その契機となったのは女三の宮の「立ち」姿である。柏木と女三の宮が不義密通を犯すために姿を見られなければいけないならば、何も「立ち」姿である必要はない。例えば「野分」巻で夕霧が垣間見た紫の上はきちんと座っていた。やはり、女三の宮の姿が「立ち」姿で書かれるのには何か理由があるはずである。

「立つ」動作が女性に対して用いられる場合、その理由は様々であった。時には「ゐざる」女性と比較し、その明るく快活な性格を表し、時には性格の醜さを際立たせる。そして、女三の宮はその幼い性格を表す象徴的な動作として用いられた。そしてその「いはけなし」「幼し」と語られる性格は、周りから容認されたものであった。生まれながら「きよらなる」な美しさを持ち、不憫な身の上であった女三の宮は、朱雀院の父性を掻き立てる。どんなにその性格に欠点があろうと、朱雀院は無理に矯正させようとはせず、それを補ってくれる人物を求めた。そして朱雀院自

身も女三の宮の欠点を地位により補おうとした。むしろ朱雀院にとって女三の宮の可愛らしい子どもっぽさは、女三の宮の魅力の一つだったのかもしれない。女三の宮自身が動かなくとも、朱雀院は女三の宮の為に動いてくれる。彼女はそこに存在するだけ幸せになれたのである。しかし、後宮と言う保護下を離れると、六条院の中ではその幼さは仇となった。

女三の宮はその幼さ故に「立ち」、その姿を柏木と夕霧に見られてしまう。それは女三の宮の悲劇の始まりである。柏木と密通が光源氏に知られ、自身は懷妊してしまう。その幼さ故に彼女は光源氏に取り繕うことも、ごまかすこともできない。彼女はただ泣くばかり、いつもは朱雀院が良いうように計らってくれていたため、彼女が考え、行動する必要もなかった。そしてその幼さこそ、女三の宮が唯一持つ個性であったのである。この個性は朱雀院により守られ、乳母たちにより育てられた。彼女たちもまた朱雀院と同様、女三の宮を彼女が思うままに育てるのである。

多くの女性たちが登場する『源氏物語』の中でも女三の宮は唯一光源氏を振り回した存在であった。紫の上を始め多くの女性たちが光源氏への思慕と、他の女性たちへの嫉妬に苛まれる中、女三の宮は光源氏を終ぞ愛することがなかった。いや女三の宮はその感情がほとんど書かれること

のない、人形のような女性である。唯一慕ったのは父である朱雀院だけ、自分を恋死にするまで愛した柏木にも、その思いを返すことはなかった。例え主人公光源氏であつても彼女の本質を変えることはできなかった。彼女は朱雀院の鍾愛の皇女として生まれその庇護下のもとで生き続ける永遠の子どものような女性なのである。

## 注

(1) 作品本文の引用、巻数及び頁数は、小学館『新編日本古典文学全集』により、私に傍線を付した。

(2) 針本正行『源氏物語』の表現―「あざる」を中心として―  
『伝統と創造の人文科学』 國學院大學大学院文学研究  
科創設五十周年記念論文集『二〇〇二』

(3) 今井源衛「女三の宮の降嫁」(『今井源衛著作集2』笠間  
書院、二〇〇四・二)

(4) 吉海直人「雲居の雁の大輔の乳母」(『源氏物語の乳母学  
―乳母のいる風景を読む―』世界思想社、二〇〇八・九)

(5) 清水好子「侍女たち」(『源氏の女君』塙書房、一九六七  
・六)

(あべ) しょうこ・学校図書館司書

平成二十六年実践女子大学卒業生)